第26回　岡倉天心記念　がん哲学外来　巣鴨カフェ「桜」

令和３年 8月14日

言葉の処方箋　　いい覚悟で生きる　樋野　興夫　P34

砕けたる心、小児のごとき心、 有のままの心

子どもを抱きしめてなだめるのと同じように、どれほど愛をもって、 傷ついている相手の話を聞いてあげるかが大切です。

常日ごろ、私が愛読している内村鑑三の著作『基督信徒のなぐさめ』の中に、「不治の病に罹りし時」という章があります。その中に、

「砕けたる心、小児のごとき心、有のままの心」

という記述があります。

がん哲学外来で多くのがん患者さんに会うようになって、私はこの言葉を実感として重く感じるようになりました。

がんを宣告されたとき、人はほぼ例外なく、心が砕け、幼い子どものように聞き分けがなくなるのです。それまでに培ってきた教養も地位も、がんや難病の前では無力です。

「あなたのがんはごく初期です」

「今はがんでも50パーセントは治ります」

医師が説明し、どんな治療をしていくかを誠実に話しても、その場では一見神妙に聞いているようですが心ここにあらず、次の日からセカンドオピニオンを求めて、病院や医師を転々とします。いわゆる「セカンドオピニオン・ショッピング」の始まりです。

ひとりの医師の意見だけではなく、別の医師の意見も聞いて、患者が治療法を選択するセカンドオピニオンは、今ではごく当たり前のことですから、それ自体に反対する医師はいません。ところが、どこへ行っても同じ診断、同じ治療方針をすすめられたとしても、納得しようとせず、ショッピングが止まりません。治療に専念できず、さらには民間療法にも頼るようになります。

「納得できない」患者さんは、裏を返せば「自分では決められない」不安を抱える患者さんでもあります。今の医療現場は、患者さんの意思を尊重して、治療法を自分で選んでもらうことが前提です。深く迷うことも理解できますが、がん医学に携わる私から見ると、聞き分けのない小児と同じです。こうなると、理論的、科学的な説得など意味を持たなくなります。

泣きわめく子どもをなだめるとき、どんな方法がもっとも有効だと思いますか。それは、愛で包み込むしかありません。母親ならばただ抱きしめてやるでしょう。しばらくすると、子どもは泣きやみます。 愛を感じるからです。

砕けたる心の患者さんもそれと同じことなのです。

私が大人の患者さんを抱きしめてあげることはできません。でも、できることがあります。ただ、黙って話を聞くのです。相手の話す内容が混乱したり矛盾したりしていても、否定せずに最後まで聞き続けます。そして、聞き終わると今度は、患者さんが悩みから抜け出すきっかけになるような「気になる言葉」を伝えます

「砕けたる心、小児のごとき心、有のままの心、ですよ」と話すこともちろんあります。

じっくり話をすると、がんになってしまった、という不条理は何も解決しませんが、患者さんはいくらか落ち着きます。「わかりました」と言うものの、 言葉の処方箋が本当に身にしみて感じるのは、もう少しあとかもしれません。

人は、がんや病気をきっかけに死というものを間近に感じると、今日明日を「いかにして生きるか」という哲学的な命題と向き合うようになります。人間にはそういう誠実なところがあるのです。患者さんや家族の方が必要としているものは、いかにして生きるかという「生きる基軸」です。

だから私は砕けたる心を抱きしめるがごとく、愛を感じてもらえるように全身全霊をもって対話をし、生きる基軸となるような言葉を選んでいます。相手を患者としてではなく、ひとりの人間としてどれほど思えるかを問いながら。

主催　岡倉天心記念　がん哲学外来・巣鴨カフェ「桜」
後援　一般社団法人がん哲学外来